

気象庁キャンペーン資料

16 - 5

気象庁広報室編集

5月の気象

日本付近が移動性高気圧に覆われると「五月晴れ」の晴天が広がります。「五月晴れ」は本来、陰暦の五月の梅雨時期の晴れ間の意味でしたが、今ではまさに5月のさわやかな晴天にぴったりの言葉として使われています。

日差しが強まると気温は急速に上昇し、最高気温が25℃を超える「夏日」の日数が各地で増加します。北海道はまだ雪の降る日もありますが、梅（札幌の平年開花日：5月6日）や桜（同：5月9日）の花が同時に咲き始め、動植物がいっせいに活動を始めます。一方、南西諸島は梅雨入りの時期を迎え、一足先に夏へと移り変わります（梅雨入りの平年日：沖縄5月8日、奄美5月10日ころ）。

このように5月は、南北に長い日本列島で春と夏が同居する月です。また、穏やかな日が多く一年の中でも快適な季節といえるでしょう。

しかし、初夏の暖気と冬の寒気がぶつかり合うこの季節は、日本海や北日本で低気圧が発達すると広い範囲で天気が急激に変わり、海や山は大荒れになり思わぬ事故が起こることもあります。このように5月に現れて急激に発達する低気圧を特に「メイストーム」と呼びます。これは1954年5月に大海難事故を発生させた低気圧から生まれた呼び名です。

発達した低気圧の影響で天気が荒れたり、上空に強い寒気が入り込み、ひょうまじりの雷や遅霜の被害をもたらす事もあるので注意が必要です。

高気圧の経路

春になると高気圧や低気圧が日本付近を周期的に通過する事が多くなります。さらに、高気圧のコースによっては、各地の天気がいろいろと変わります。

図1に大きく4つに分けた高気圧の経路を示します。

オホーツク海コース

オホーツク海方面にあらわれてゆっくり南へ移動します。このコースの場合は、関東から北の太平洋側で天気がぐずつきます。

北方コース（北高型）

大陸から日本海を経て、北日本をとこのコ

ースは北高型と呼ばれます。高気圧のとおり道となる北日本は晴れ、東・西日本は曇や雨の多い天気となります。

本州横断コース

本州の真上をとこのコースは晴天の代表的なコースです。全国的に晴れますが、高気圧の動きが速いことが多く晴天は長続きしません。

南方コース（南高型）

日本の南岸をとこのコースは南高型と呼ばれ、各地で晴天が長続きします。また、高気圧からの南風のために気温が上がります。

注意事項

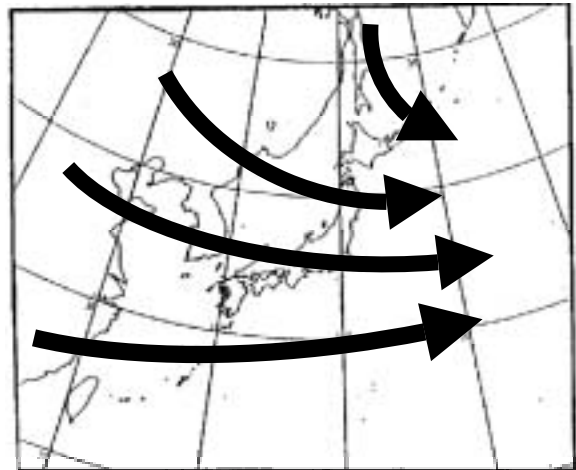


図1：高気圧の経路パターン

遅霜...

「八十八夜」は立春から数えて88日目の日（5月2日ごろ）に当たり、このころを境に霜がおりることが少なくなるといわれ農作業が本格的に始まります。しかし、移動性高気圧に覆われて、風が弱く朝にかけて快晴になると、放射冷却によって冷え込みが厳しくなり、霜が発生しやすくなります。この時期の霜は「遅霜（おそじも）」と呼ばれ、お茶や果実など農作物に被害を与えます。

春山...

ゴールデンウィークは絶好の行楽シーズンでもあり、登山を楽しむ人も多くなります。しかし、発達した低気圧が通り、山の天気が冬へと逆戻りするなど、天気の急変による遭難事故が多く発生しています。無理な計画は立てず、情報を十分に入手して行動しましょう。

～ 気象庁の海水温・海流情報 ～

《正確な海の情報、毎日おとどけします》

海水温や海流は、船舶が安全で経済的な航路を選択するために必要な情報です。また、魚類の分布に大きく影響するために、これらの情報は漁業にも欠かせないものです。さらに万一の海難事故の救難活動にも、海水温や海流の情報は利用されています。わたしたちも海の情報をもっと活用することで、釣り、海水浴、潮干狩り等の海洋性レクリエーションを安全に楽しむことができます。

気象庁では、海水温や海流の各種情報を、気象無線ファクシミリ放送(JMH)するとともに、インターネットの気象庁ホームページで公開しています。平成16年3月からは、日本近海の海面水温、深さ100mの水温及び海流について、最新の情報を気象庁ホームページに毎日掲載しています(図1, 2)。これらの情報は、毎日最新のものが発表されることから、さらに多くの利用が期待されます。

《海洋モデルによる利用しやすい海の情報》

気象庁の海水温・海流情報は、人工衛星、海洋気象観測船、商船・漁船、ブイなどによる観測データをもとに作成されています。しかし、人工衛星は雲があると海面水温の観測ができません。また、船舶による観測も、海域によってデータ数にばらつきがあります。このような観測データの不均一な分布は、信頼性の低い情報をもたらすことになります。

そこで気象庁では、海洋の状態をコンピュータで再現できる「海洋大循環モデル」を利用して、人工衛星、船舶、ブイなどの観測データを取り入

み、格子点データを出力する「海洋総合解析システム」を開発しました。このシステムでは、観測データと物理法則に基づき、水温、塩分、流れについて、北太平洋の海面から海底付近までくまなく計算を行います。つまり、分布が不均一な観測データを、海洋大循環モデルで補い、以前より、信頼性の高い海水温・海流の状況を、どの海域でも得ることができるようになったのです。これまでの検証では、日本付近の中規模(水平の大きさが数十キロメートルから数百キロメートル程度)の渦の分布や、変化の激しい黒潮の位置などについても、計算結果と観測結果がおおむね一致することが確かめられています。

気象庁ホームページでは、この「海洋総合解析システム」の計算結果による海の情報をもっと毎日更新しています。気象庁ホームページにはこのほかにも月平均・旬平均の海面水温図、平年値との偏差図が掲載されているほか、海面水温と海流の旬予報、月予報が掲載されています。また、それぞれの掲載情報についての理解を深めていただくための解説も用意しています。ぜひ次のアドレスにアクセスしてみてください。

気象庁ホームページ(トップページ)

<http://www.jma.go.jp/>

海洋の情報ページ

<http://www.data.kishou.go.jp/marine/>

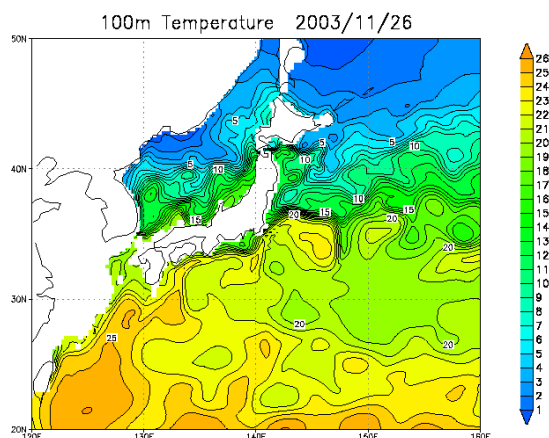


図1 ホームページ掲載
日本近海深さ100mの水温図の例
等値線は1℃ごと(右側のスケール)

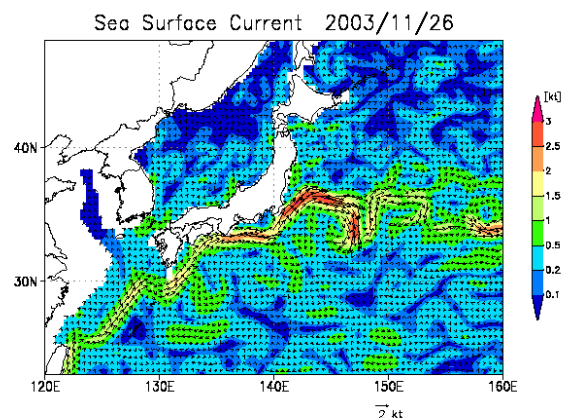


図2 ホームページ掲載
日本近海海面海流図の例
右側のスケールの色で海流の速さ(ノット)を示す